

棋士の情景

～勝負の巖かでは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段 島 朗

(第5話)

棋士の引き際

～順位戦に対する考察(上)

名声はうたかた。人気は蒸気のようなもので、金は羽根が生えたように飛び去ってしまう。後に残るのは、選手として生きた人間の姿だけだ。(D・ハルバースタム『勝負の分かれ目』NBA名選手のことば)

日本社会がおしなべて多くの業界で、定年延長の傾向になってから久しいと思います。

棋士の場合も65歳という区切りはありますが、勝負の世界ゆえ負けが混むことが一定年数続くと、若くして引退に追い込まれるケースもあります。またある年齢まで上位を保ち、落ちてゆくペースが緩やかであれば、65歳を超えても現役を続けられることもありますし、健康上や諸事情で早く引退される場合など、個人によって引き際はさまざまといえます。

棋士の場合、もともと将棋が大好きでこの道に入った方がほぼ全てでしょうから、現役をできるだけ長く続けたいのは自然な思いといってよいでしょう。また現実問題として、生活の糧に直結してくるのも当然です。

順位戦という一年間かけて戦うリーグ戦が、棋士生命の長さを左右するのですが、自分の場合17歳で棋士(四段)になれて18歳から順位戦に参加、昨年度62歳になるまで、通算で44期のリーグ戦を戦ったことになりま

す。一番下のクラス(C2級)から始まり、13年目・31歳のときに望んだ以上の一番上のクラス(A級)に到達できました。A級まで達して初めて、一人しかいない名人への挑戦権を争うリーグに参加できます。AとC2の間にB1級・B2級・C1級とクラスがあり、一年に一つずつ好成績なら上がることができません。谷川浩司十七世名人、羽生善治九段、藤井聡太竜王・名人など、一時代を画した棋士はこのピラミッド型の関門を最短距離、それに準ずる4～5年ほどでクリアし、最上位クラスに上り詰めています。

自分の成績が目に見えて下り坂になったのは40代半ばの頃からで、それから15年ほど経た58歳のときに、新人時代と同じC2クラスまで落ちてしまいました。若い頃に頑張った貯金(研究量や自信)を、中高年で放蕩(現代将棋についていけなくなった)した感じでしょうか(苦笑)。下から上まで一通り経験できたのは、本当にありがたいことと感謝しています。

私の場合、C2クラスでの対局権利年数はあるのですが、昨年度をもって順位戦は退き、ほかの棋戦を3年間65歳まで健康であれば指し続けられる道を選びました。ささいな決断ながら安堵が大半、寂しさがごく少々という感じです。